

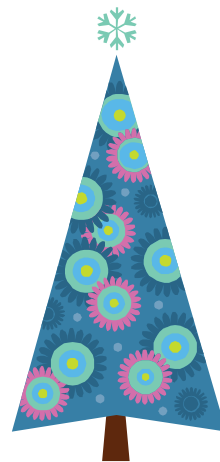
# 図書館だより No. 7

平成 25 年 11 月 22 日発行

猛暑の年は、寒さも厳しくなると言いますが、今年の冬も、3年連続で“寒い冬”になるとの予想が出ています。寒くなってきて気をつけないといけないのが、“冷え”です。女性にとって冷えは大敵ですので、冷え性の人もそうでない人も常に体を温めるよう心がけましょう。

さて、今日の放課後はイルミネーション点灯式が行われます。記念館前に色とりどりのイルミネーションが点灯され、日の落ちた後の学校を賑やかに灯してくれます。今日の放課後は寒さを忘れて、点灯式のカウントダウンをみんなで盛り上げてきてください。これからは、昼間は紅葉の景色、夜は光の景色と2つの景色を楽しめる毎日になりました。

イルミネーションといえば、この近くでは「西武ゆうえんち」のイルミネーションが綺麗だと評判です。今年で4年目を迎えるこの西武ゆうえんちのイルミネーションは約220万球のLEDが光り輝く、首都圏でも最大級のイルミネーションなのだそうです。幻想的な光の世界を楽しみに出かけてみてはいかがでしょうか。



## 冷え知らずの体になろう\*

### 495-ド 『冷え性ガールのあたたため毎日』 土井 里紗 || 監修 アース・スター エンターテイメント

この本と自分の日常生活とを照らし合わせてみると、様々な箇所に冷えの原因が潜んでいることに気づきます。その冷えを改善していくには、体を温めることが大切です。そして、その温め方には、たくさんの種類があります。食事・睡眠・入浴・ファッション・エクササイズ・メンタルと、冷えの原因に合った改善の仕方がかわいいイラストつきで載っています。ちょっとした工夫で、体はもっと温まります。自分の体の冷えの原因とその改善法を知り、この冬は冷え知らずの体で過ごしましょう。

## 光を創る仕事\*

### 545-イ 『LOVE THE LIGHT, LOVE THE LIFE』 石井 幹子 || 著 東京新聞

照明デザイナーとして国内外で活躍する石井幹子さん。今や、光り輝く夜の東京タワーは東京の夜景として定着していますが、昔の東京タワーは電球がポツポツと寂しく光るだけだったそうです。その東京タワーを生き返らせたのは石井さんです。そして、あの3. 11の後の東京タワーに浮かび上がった「GANBARO NIPPON」の文字もまた石井さんのアイデアです。「省エネ、創エネ」をコンセプトに、見る人の心に沁みる光を創り出す石井さん。照明デザイナーになるために歩んできた道はどんなものだったのか、そして石井さんの手で世界中にどんな光の世界が作り出されているのか、この本で知ってみてください。

## 蔵書点検が始まります

### 図書館閉館期間

12月9日(月)～12月19日(木)

今年も上記の日程の期間、図書館は蔵書点検を行います。蔵書点検では、図書館にある本が行方不明になっていないか、きちんと正しい場所に配架されているかを確認します。そのため、蔵書点検の期間中の図書館は閉館となります。なお、閉館中もコピー機の使用と本の返却は可能です。みなさんには、不便をかけてしまいますが、円滑に蔵書点検が行えるよう協力をお願いします。また、記念館自体は通常どおりに開館していますので、生徒ホールやピアノ室を利用することは可能です。

蔵書点検に伴い、みなさんにもうひとつお願いします。返却日を過ぎた本を借りっぱなしの人は蔵書点検が始まるまでに必ず返却してください。

## 図書館と県民のつどい

12月1日(日)桶川のさいたま文学館にて、「図書館と県民のつどい2013」が行われます。これは、図書館と読書に興味がある人のためのイベントで、今年で7回目を迎えます。

記念講演には毎年、有名な作家さんがやってきます。近年は、あさのあつこさんや上橋菜穂子さんといった児童文学作家さんが講演にいらしていました。そして、今年『楽園のカンヴァズ』が山本周五郎賞を受賞したり、『ジヴェルニーの食卓』が直木賞候補にも選ばれたり、話題に乗ることの多い作家、原田マハさんが講演を行うそうです。残念ながら、講演は満員となってしまいましたが、県内の公共図書館、高校図書館、大学図書館が展示を行っていて、様々な図書館の様子を知ることが出来るイベントなので、都合がつく人はぜひ立ち寄ってきてみてください。

### 913.6-ハ 『カフーを待ちわびて』 原田 マハ || 著 宝島社

『嫁に来ないか。幸せにします 与那喜島 友寄明青』旅先の神社で友寄明青が冗談まじりに書いた一枚の絵馬。そんな絵馬のことなんて、すっかり忘れて過ごす明青の元に、幸と名乗る女性から手紙届く。その手紙には、驚く内容が書かれていた。なんと、幸は絵馬を読み、嫁になりたいと手紙を送ってきたのだった。そして、信じられない状況に戸惑う明青の前に幸は本当に現れた。

明るく、奔放で、人懐こい幸に心惹かれていく明青。その想いが大きくなるほど、幸を近くに感じるほど、失う怖さも大きくなっていく。沖縄の綺麗な景色と心に傷を抱えたふたりの行く末に夢中になってしまう物語。



## 世界を旅する12ヶ月 ～イタリア～



「世界を旅する12ヶ月」第6回目は、イタリア共和国です。前回紹介した北欧のフィンランドの反対にあたる南ヨーロッパに位置し、ブーツのような特徴的な形をしていることで、覚えやすい国です。またイタリアは国土の90%は山間部と、日本とよく似た地形の特徴をもっています。

首都はローマ。国の至るところにコロッセオやピサの斜塔、ミラノ大聖堂など数多くの歴史的建造物が存在し、美しい街並み

が広がっています。また、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロといった巨匠が誕生しており、美術館がとても充実しています。日本からは直行便で約12時間と遠い国ですが、見どころに富んだ国ですので、一度は訪れてみたいですね。

### 街並みを楽しみながらイタリアを歩こう\*

#### 520-セ『世界の建築・街並みガイド イタリア | ギリシャ』 エクスナレッジ

イタリアを訪れて思わず見とれてしまうであろうものが、建築とその街並みです。

前半は都市別に見どころとなる建築・街並みがズラリと紹介されています。行ってみたいと思うところを数え始めたらキリがなくなってしまうのではないかと思うほど、美しい名所がたくさんあります。また、中には「これは何だ!？」と目を引くちょっと変わった建築物もあり、そちらにも興味を引かれます。

後半では、建築や美術の専門家が「イタリア・デザインの魅力を探る旅」、「イタリアの広場を巡る」などテーマに沿ってとっておきのコースを紹介してくれています。イタリアを旅している気分になりながら読んでみてください。

### 気分はもうイタリア! \*

#### 877-ム『街歩きのアリア語』 岩田 デノーラ 砂和子 || 著 三修社

イタリアでの挨拶や道案内、ちょっとした会話など、基本のイタリア語を学べます。中を開くと、イタリアの街並みの写真がたくさん載っていて、とてもおしゃれな感じが漂う語学本です。実際に街で使われている標識や看板などの写真も載っていて、それらに書いてある言葉がどんなことを伝えているのかをわかりやすく教えてくれています。また、写真を撮る時の「はい! チーズ」の声のかけ方やナンパの断り方など、イタリアで「これは知っていたらきっと役立つ!」という言葉の使い方がたくさん載っていて、本当に便利です。

あまり馴染みのない人も多いであろうイタリア語ですが、声に出して話してみていると、その雰囲気味わえ、楽しいです。何人かで読み合ってみるのもよいでしょう。

### 切ない想いが交差する愛の物語

#### 913.6-エ『冷静と情熱のあいだ』 江國 香織 || 著 角川書店

イタリアで生まれ育ったアオイが日本で出会った阿形順正<sup>あがたじゆんせい</sup>。片時も離れたくないと、ずっと一緒に生きるのだと思えるほどの相手だったにも関わらず、ふたりを待っていたのは悲しい別れだった。

大学を卒業後、イタリアに戻り、新しい恋人マーヴとの生活が始まっても、アオイの心から消えることのない順正の存在。それでも思いの全てを胸の奥にしまい込み、アオイは今ある幸せの中で暮らす。そして月日は流れ、29歳になったアオイに届いた順正からの手紙。いつか愛する人とのほりたと思っていたフィレンツェのドゥオモ。ふたりが約束した10年後がもうすぐやってくる。

この本はアオイの視点で書かれていますが、これと対になる順正の視点で書かれたもう1冊の『冷静と情熱のあいだ』(辻仁成 || 著)も合わせて読んでみてください。

### イタリア人作家の優しいまなざし

#### 973-ダ『イクバルの闘い』 フランチェスコ・ダダモ || 著 鈴木出版

みなさんの知っているイタリアの作家さんは、何人いますか? 意外と少ないのではないのでしょうか。この小説の作家ダダモさんは、新聞に載っていたイクバルについての小さな記事を読み、この物語を書きました。親に売られ、パキスタンのじゅうたん工房で奴隷のように働かされ続け、けれど決してあきらめずに自由を勝ち得、同じ境遇にある他の子のために戦ったイクバルの物語を。だから本物のイクバルより少し格好よすぎるかもしれないし、勇敢すぎるかもしれないそうです。イタリアには陸続きの東ヨーロッパやアジアから、貧しい国の人たちが、たくさん国境をこえて入ってきました。なかには小さな子どももいました。ダダモさんは、この物語によって、自由を獲得するにはどうすればいいのかを伝えたかったのでしょう。今もどこかにいる新たなイクバルのために。



### 図書館司書の「今月はこの本を読みました」



今月は村上春樹さんの著書『辺境・近境』(915.6-ム 新潮社)を読みました。図書館だよりの第4号で紹介した『雨天炎天』を読んだのをきっかけに、すっかり村上さんの書く旅行記が好きになってしまいました。

今回の本では、日本のあちこち、メキシコ、中国、モンゴル、アメリカと様々な場所を旅した手記が載っていますが、うーん、やっぱり村上さんの旅行記はおもしろい!! 無人島では、おびただしい数の虫との一夜に1日で敗北したり、メキシコではバスで延々と流れるメキシコの歌謡曲に辟易したり、と旅のあちこちでえらい目に合い、それに憤慨しつつもその旅はいつも楽しそうです。あとがきに、読者に「旅っていいな」と思わせるのは難しい、と書いてありましたが、私はこの本ですごく「旅っていいな」と思いました。

また、その地を訪れなければきっとできなかった体験やその光景に出会わなければ感じる事のなかったであろう想いというものがあるのだということを村上さんの旅を通して、改めて感じました。

